

レイチェル・バーク、ジュディス・ダンカン著
七木田敦・中坪史典監訳、飯野祐樹・大野歩・田中沙織・島津礼子・松井剛太訳

『文化を映し出す子どもの身体 —文化人類学からみた 日本とニュージーランドの幼児教育—』

(福村出版、2017年)

小 針 誠

2017年1月、千葉市が「千葉市立保育所男性保育士活躍推進プラン」を発表し、話題になった。なかでも注目を集めたのは、性差に関わらない保育の実施を保護者等に周知する内容だった。その策定の中心を担った熊谷俊人千葉市長の説明によれば、昨今、男性保育者が女兒の着替えやオムツ替えなどに関わらないようにして欲しいという保護者からの要望がとみに増え、その現状を打破したかったからだという（東京新聞 2017年2月19日・朝刊）。

これは子どもの身体に関わる非常にデリケートな問題である。ところが、これを報じたマスコミの関心は、成人男性（このカテゴリーには男性保育者も含まれる）の小児性愛を懸念する内容や保育士不足の問題ばかりに矮小化されてしまい、肝心の「子どもの身体」をめぐる議論はほとんどなかった。「子どもの身体」とは誰のものなのか、子ども本人のものか、保護・監督する大人なのか、そして私たちは子どもの身体をめぐる、どのような状態を適切（または不適切）だと考えているのだろうか、そのためには何がなぜ必要（または不要）なのだろうか。

これらの疑問に明確な答えを出すことは存外難しい。ひとまず「そういう文化や習慣だから……」というほかないのではないだろうか。

本書は、ニュージーランド（以下、「新国」）出身の幼児研究者が北海道ユリ市の私立おか幼稚園と新国ラタ市のカイマイ幼稚園（いずれも仮称）をエスノグラフィックに観察・比較しつつ、日本と新国それぞれの保育者に、他方の国の園の様子を録画・公開して、保育実践や幼児（子ども）の身体に対する解釈

や認識をインタビューし、分析と考察を試みている。

本書の構成は以下の通りである。

- 第1章 序
- 第2章 子どもの身体をめぐる論争
- 第3章 カリキュラムを身体化すること
- 第4章 リスクと身体
- 第5章 規律としての身体
- 第6章 自然の象徴としての身体
- 第7章 異なった文脈における身体

本書は、「子どもの身体」をめぐる、3つの身体論をもとに、日本と新国の保育に対する認識と実践の比較を試みている。その身体論は、モースの身体技法、ブルデューの社会的・文化的関係性のなかでの身体、フーコーの言う監視される身体のそれぞれの議論を指している。加えて、ギデンズやベックなど、既に日本でもお馴染みの社会学者に言及しながら、後期近代における子どもの身体のリスクに関する内容（第4章）を含むなど、*Sociology of Childhood* の書であるといつてよい。

本書を通じて、評者は、新国の保育のあり方や保育者の認識・実践のあり方とともに、新国出身の研究者から見た日本の保育における「子どもの身体」をめぐる観念や習慣を知ることができた。また、それは、「外」からの指摘や説明を通じて、「内」にいる日本または新国それぞれの文化に馴染んできた者、特に幼児教育実践者たちが自明なものとして見なしてきた自文化のあり方、子どもの身体をめぐる議論や習慣、保育実践のあり方を相対できる視点を提供した好著ゆえの示唆でもある。

そのうえで、本書の内容に関わる課題や本書から私たちが引き受けるべき研究上の問題について、以下述べてみよう。

第一に、研究対象の幼稚園について、日本と新国それぞれの園を選んだ理由に関わる説明が求められよう。日本の幼稚園は設置主体や地域によって、教育目標も実践のあり方も多様である。多様な幼児教育実践のなかで、それぞれ

の幼稚園を調査対象または比較対象としてサンプリングした理論的根拠が求められる。

第二に、両国の保育者は比較対象の国の実践やそれを支える習慣・文化をどのように受け止めるべきだろうか。本書から、①子どもの身体を規律するのは、②保育者の認識と実践のあり方であり、それを拘束するのは③幼児教育や保育の文化や規範（大学等の養成課程のあり方も含む）であり、さらにその外側には④世間からの眼差しや社会の認識がある。この四層の入れ子構造は、突発的な事件や事故、マスメディアの報道や研究者の知見の発表によって容易に変化し、時に不安定する。それにも関わらず、この子どもの身体をめぐる社会構造や文化的な背景を十分に理解せずに、他国・園の理念や実践を無批判に賞賛・移入したり、本国・園のそれを安易に否定・中止してしまうこともある。他の国や園の理念や実践に対する慎重かつ丁寧な理解と参照こそが求められているのだろう。ただし、これは保育や幼児教育に限らず、学校教育全体についても言えることである。

第三に、研究者にとっての課題である。本書において言及・引用される日本の幼児教育や日本文化の解釈の多くは、欧米人や日本人による英語文献、または限られた邦語文献の英訳書に依拠している。評者はそれが誤りだとか偏っているということを指摘したいわけではない。本書のテーマとして参照すべき幼児教育や保育の実践に関する邦語論文や著書はそれこそ膨大にあり、さかんな研究領域であるにも関わらず、本書がそれらにほとんど言及していないのは実に残念なことではないか。そのためには、日本人研究者が外国語（英語）で発表するか、それとも日本語を母語としない研究者が日本語に通じるか——比較研究には未だ言語的な課題があることを改めて思い知らされた。

そうとはいうものの、本書は、いわゆる訳書にありがちな堅苦しい構文調の訳文や表現がほとんどなかったこともあり、一息に読むことができた。それはひとえに監訳者はじめ若き研究者たちの訳出の労にあるのだろう。この点においても、これからの幼児教育や保育の実践・研究において、日本と新国両国の「架け橋」としての本書の意義や貢献は決して小さくないのである。